様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４２０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１７３６６

研究課題名（和文）国語教科書から見る植民地台湾の理想像とその現実

研究課題名（英文）The Ideal and Reality Based on the Japanese Language Textbooks of Colonial Taiwan

研究代表者
陳　虹ブン（Chen, Hungwen）

平安女学院大学・国際観光学部・准教授

研究者番号：６０５３４８４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、日本統治下の台湾で使われていた初等・初級国語（日本語）教科書に描かれている理想な植民地「国民像」「生活像」と台湾人児童の「実生活」の落差を明らかにすることである。なお、植民地教育の研究成果を最終的に正確かつ分かりやすく学習者や一般人に伝えるために、実生活に密接した視点を取り入れて分析を行った。上述の目的を達成するために、研究期間中、日本統治下台湾人児童の日常生活と国語教科をテーマに計4本の論文を発表し、さらに一般や中等教育の学校教育向けの副教材としてブックレット『日本統治下の教科書と台湾の子どもたち』（風響社、2019）を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は3つの目的をもって始めたものである。一つは教科書に描かれている子どもの理想像と現実の子どもたちの間の違いを検証すること。一つは、植民地時期の教科書を通して教えられた「日本」は戦後の台湾にどのような形で残されているのかを考察すること。最後に、植民地教育の研究成果をよりアクセスしやすい形で発表・公開することである。本研究は執行機期間を終えた段階で、研究成果を計4本の論文を発表し、学校教育でも使える副教材として1件の図書（ブックレット）を出版した。上述の研究目的を果たすだけでなく、研究成果を広く社会へ公開・発表できたことにも大きな意味を持っている。

研究成果の概要（英文）：In Colonial Taiwan, the integration policy including Japanese education was promoted, and the Japanese language textbooks for Taiwanese children were also edited. I analyzed these textbooks to discuss the daily life of Taiwanese children and explored how the content of teaching materials matched with children’s real daily life. Then I found that the contents of the textbooks were changed in different periods. Most of the materials described the "ideal image" made by the Japanese government, not completely matching with the real life of Taiwanese children.
I also focused on the school life. Unlike usual family life, the modern "school" was a completely new experience to for the Taiwanese children. Everyone enjoyed the school life, but it also meant they received the education embodying the colonial ideals designed by the colonial government. Especially the practical subjects were structured to meet the local economic needs, faithfully reflecting the economic purpose of colonial rule.

研究分野：教育学

キーワード：教育史　植民地教育　教科書研究　台湾　国語教科書

１．研究開始当初の背景

植民地台湾の国語教科書に関する研究については多数の研究者による蓄積があるが、主に教材内容の解析や植民地政策との関連性の解明に重点を置いたものが中心であった。教科書に描かれている児童像は、植民地に生きる子どもたちの実際の姿とはどう違うか、どのように変化していくかの分析はまだ少ない。なお、植民地教科書としての教育効果及びその影響についての検証も不足しており、さらなる調査が必要であった。また、その研究成果を広く発信する点においても、まだ工夫する必要があると考える。

２．研究の目的

本研究（国語教科書から見る植民地台湾の理想像とその現実）は、日本統治下の台湾で使われていた初等・初級国語（日本語）教科書に描かれている理想な植民地「国民像」「生活像」を、当時台湾社会の実際状況や生徒たちの実生活と照り合わせ、総督府は植民地台湾の何を変えたかったのか、最終的に何を変えられたのか、何を変えられなかったのかを明らかにし、台湾の国語教科書が担う役割とその教育効果を検証することを目的とする。なお、これまで筆者は教材内容の分析を中心に研究を進めてきたが、研究成果をより正確かつ分かりやすく学習者や一般人に伝えるために、より実生活に密接した視点での分析が必要だと実感している。最終的に研究成果を大学だけではなく、一般人をはじめ、学校教育でも使える参考資料にすることも本研究の目標である。

３．研究の方法

本研究の主な研究対象は植民地期台湾の教科書と当時の台湾人児童の「実生活」である。時期による教材内容と生活スタイルの変化を把握するため、常に台湾に関する民俗資料や地方の新聞、教育雑誌、聞き取り調査、教育関連者が残した記録などの一次史料を駆使する。なお、比較の視点を取り入れ、教科書の「理想像」と「実生活」を綿密に再現したうえで、その内容を対照・比較し、その相違点を明らかにする。さらに、隣接諸学の成果摂取、必要時専門家の協力とアドバイスも取り入れている。

４．研究成果

本研究は執行期間中において、計論文４件、図書１件の成果を上げている。

(1)「日本統治下台湾人児童の日常生活について―国語教科書を手掛かりに」(2017)

この論文は日本語の話せない台湾人の子供たちが使う国語教科書とその中の挿絵を主な分析材料とし、衣、食、住及び娯楽生活などの面から、彼らの日常生活についての文献的考察を行った。また、当時の台湾社会を対象とする民俗や慣習の研究資料を参考に、教科書の内容と照り合わせながら、教材や挿絵の中の台湾人の子どもはどのように描かれているのか、どのような生活を送っているのか、そして、教科書の内容は実際の生活との間にギャップが存在するのかをも明らかにした。

分析の結果として、国語教科書の内容は時期によって変化が見られ、教材に述べられている児童像も時期によって違っていた。統治初期から戦争期に入るまでは子ども達の真実の姿や生活の様子が忠実に描かれることもあるが、多くは統治側の求める植民地の人民が持つべき「理想像」であり、子どもが営んでいる現実の生活とは完全に合致しているものではなかった。植民地の教科書に統治側の目的に合わせた意図的な操作が加えられているからこそ、統治者である日本は植民地台湾の住民に何を求めていたのか、どのようになってほしかったのか、その基準を具体的に知ることができるのだと言えよう。

(2)「日本統治下台湾人児童の日常生活について(その 2)―国語教科書を手掛かりに」(2018)

次に 2018 年の続編では台湾人児童が通う公学校教育内容を中心に、子どもが過ごした学校生活、受けた教育の内容について考察を行った。該当論文の分析対象は国語教科書に限らず、公学校で使用されていたほかの科目の教科書へまで範囲を広げ、文献的な考察が行われた。また、当時から残されてきた学校の卒業記念誌、写真帖及び教育雑誌などの内容を参考に、教科書の内容と照り合わせながら、教材や挿絵の中の台湾人の子どもはどのように描かれているのか、どのような学校生活を送っていたかをも明らかにした。

Formosan school-girls waiting for classes to begin in an ancient temple of Confucius which the Japanese have turned into a school

例えば右の写真に写っている子どもたちのことである。この写真は 1920 年代に台湾に訪れた外国人が撮影した台湾人の女子児童たちの写真である 。写真の下の説明書きによれば、この女の子たちは孔子廟の前で授業が始まるのを待っていて、現在その孔子廟は日本人の手によって学校になったとのことであった。「廟(びょう)」というのは日本の神社やお寺のような建物で、神様や神霊などが祀られているところである。日本統治以前の台湾には近代的な「学校」がなかった。子どもたちは「書房」とい

うところ（日本の寺子屋に相当する）で勉強していた。「書房」での教育は地域にある廟などの部屋を借りて行われていた。台湾での公学校は基本的に地域の住民と経費によって成立・運営していたので、信仰の中心となる廟は大半地域の中心に位置し、スペースもあるので、公学校を設置するのに最適な場所であった。台湾人児童が勉強する内容も書房での漢文中心の読み書き教育から、科目がきちんと設定されている近代的な学校教育へと変っていった。

そもそも書房はすべての子どもが通えるところではなかった。経済的に余裕のある家庭の台湾人児童だけが学費を払って通っていた。また、当時の台湾社会は「男尊女卑」の考え方がとても強かったので、書房に通えるのも主に男子であった。書房へ行って勉強する裕福な家庭の女子はいたが、ごく限られた一部であった。

また、写真の中に縄飛びをしている女の子たちは纏足ではなく、裸足で楽しく跳び回っている。その姿は一般の女の子も普通に入学できる公学校が設置された以降のことだと考えられる。それでも、当時公学校生徒の構成を見ると、女子生徒の数は一般的に男子生徒の数より少なかったのである。特に農村部の公学校ではその差がさらに明らかである。1920 年代の台北にある孔子廟の前では、台湾人の女子生徒が何人も縄跳びをしているが、まさに近代教育が始まったことを象徴する大きな変化だと言える。もちろん、彼女たちが身にまとう服、髪型などはすべて台湾人児童の生活を物語っている。

このように、毎日の家庭生活とは違い、日本が台湾の子どもたちに見せたのは「公学校」という全く新しい近代的な産物であるため、学校行事から教育内容まですべてが子どもたちにとっては新鮮で面白い物ばかりであった。もちろん、その全ては総督府が意図的にセレクトした、見せたい、教え込みたいものでもあった。

教科書の内容だけでは、台湾総督府は台湾の教育に力を入れているようにも見えたが、公学校が台湾人に施した教育は基本的に最初から、人々の関心が政治に向かないようにすることを目的としていた。日本語を教え、統治の便を図るのが主な目的だということも明らかであった。教科書で学問や勉強を勧めながらも、将来は誠実な奉公人、商売人や労働者になるようにセレクトされた教材が取り入れられていた。そのため、教科書の中には基礎な実学知識がたくさんつめられているにもかかわらず、すべて初歩的なものにとどまっている。頑張って学問を追究して、将来は出世してえらくなるという可能性を示唆する教材はなかった。忠誠なる日本の国民として、地域の労働力となり、日本に尽くすように教え込むのが教材を編集する時の基本的なスタンスであった。

（3）「日本統治下台湾人児童の日常生活について(その３)―教科書から見る台湾の産業発展」（2019）。

子供たちの生活は家庭や学校以外に、社会環境による影響も大きく存在している。50 年間も続けていた日本の植民地統治と社会開発は台湾の社会構造や経済環境を変えてきたため、第 3 編の論文では国語教科書の産業関連教材に注目した。

日本による台湾の植民地統治において、経済的な利益を獲得するために、農産品や加工品の生産・製造に必要な労働力の育成は欠かせない。台湾人児童が通う初等教育機関「公学校」（のちに国民学校）の教育主旨でも「生活に必要な知識と技能を授けること」を目的の一つとして掲げられている。この論文はその主要科目である国語科の教科書を中心に、台湾における産業発展の時期に合わせ、産業や物産に関連する実学教材の変遷について考察を行った。特に、植民地時期において台湾の重要な生産品である「米、砂糖、茶、アルミニウム」等の教材を取り上げ、各時期における教材内容の変化と特徴を明らかにした。

この論文の考察を通し、産業関連教材の内容変遷は産業発展の流れに一致していることが確認できた。さらに、「茶」の教材は他の生産品とは異ない、海外への重要貿易商品として、砂糖や米に並び、国語読本に取り入れられていることもわかった。全体的にみれば、台湾人児童用の国語教科書は植民地現地の子供として学ぶべきものと、その実際の生活からかけ離れないように教材内容の取捨選択に配慮しているといえる。

（4）台湾における終わらない日本ブームについてー歴史と生活文化のつながりから」（2019）

上記 3 件の論文の一部を抜粋し、台湾における日本観光、文化ブームを軸に「台湾における終わらない日本ブームについてー歴史と生活文化のつながりからー」をまとめた。植民地統治の 50 年間、日本人は一般の台湾人の生活文化にたくさんのものを残していった。これも台湾を訪れた日本人はどこか懐かしさを感じることが多い理由の一つである。本論文ではその痕跡を探る手かがりとして、植民地時期に日本語の話せない台湾人の子どもたちが使っていた日本語教科書等の内容を研究の材料にし、衣、食、住及び学校生活等の面から、台湾人児童の生活と教科書の中に描かれている様子を説明し、なぜ植民地時代で教わった習慣や生活スタイルは今でも残っているかについての考察を行った。

（5）ブックレット『日本統治下の教科書と台湾の子どもたち』（2019）

このブックレットは植民地期に使用された教科書を主軸に、植民地教育の意味から、日本統治下における台湾の教育、教科書編さん、教科書の内容、台湾人児童の生活史、植民地期台湾における都市と農村問題にまで議論を展開した。特に第三部分の「国語教科書の中の子どもとその生活」においては、本研究の成果を中心に書きまとめ、教科書の変化に反映される教育政

策の意図やその影響を浮き彫りにした。
　また、本書の出版は本研究が設定した「一般人をはじめ、学校教育でも使える参考資料にする」という目標を実現するためのものでもあった。

〈写真提供〉秋恵文庫

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計　４件）
①陳虹彣、日本統治下台湾人児童の日常生活について―国語教科書を手掛かりに―、平安女学院大学研究年報、査読あり、第 17 号（2017.3）、pp.18－25。
https://st.agnes.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_action_common_download&item_id=2305&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1&page_id=13&block_id=31
②陳虹彣、日本統治下台湾人児童の日常生活について（その２）―国語教科書を手掛かりに―、平安女学院大学研究年報、査読あり、第 18 号（2018.3）、pp.13－22。
https://st.agnes.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=2338&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1
③陳虹彣、日本統治下台湾人児童の日常生活について（その３）―教科書から見る台湾の産業発展―、平安女学院大学研究年報、査読あり、第 19 号（2019.3）、pp.31―40。
④陳虹彣、「台湾における終わらない日本ブームについてー歴史と生活文化のつながりからー」、『観光学の未来』所収（平安女学院大学国際観光学部編著）、2019 年 3 月 31 日、pp.62-74、白川書院。

〔図書〕（計　１件）
①陳虹彣、『日本統治下の教科書と台湾の子どもたち』（植民地教育史ブックレット）、2019.2.25、風響社。http://www.fukyo.co.jp/book/b440290.html

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。